



通信員會

自然を想う

千 広 俊 幸

重厚なおもむきをしめすカブトムシが、二百円もしてデパートで市販されているがた。しかも、北海道に自生していない動物である。こんな反自然的な社会のうごきに、私たちはじっと耐えながら、直視できない巨大なコマーンシャルベースの波にゆさぶられて、生きていていいものなのであるか。

自然へのはげしい渴望が、ときとして忙しい毎日の、予期しない時間におそってくるのはどうしたことであろうか。春がくると芽をふき、花が咲き、鳥はうたう。四季がこんなにアタセントをつけながら、あるピリオドをうちながら転換するこの北ぐに

の自然は、なんとすばらしい風物詩であろうか。私は、この自然をあい手にほぼ二〇年の仕事をつづけてきた。机のうえで議論をたたかわせて一八〇度もちがう意見の対立があつても、山で、自然のあやなす有機的なこの集合体をまにに話題を展開するとさきほどの対立がふしぎに一致点の方向にむかう。これほど自然は偉大なものであり机上論の相剋をあざ笑うように、多くのものを教えてくれる。

近ごろは、自然を、森林を知らない、森林技術者が多すぎるような気がしてならない。机のうえで、森林をとりあつかう手まへ勝手な偶像をつくりあげて、それを柱として、とるに足らない議論をとりかわしている人たちもいる。まさに乾ききった砂上のろう閣とはよくいったものだと思う。森林の中に坐して、数時間もこれらを見つめてみると、おもしろいほど、いろいろな考えがでてくるものである。

黒いほどのタンネのクローネに、もえるような広葉樹林のエメラルド・グリーンに自然のもつ無限の奥ふかさがにじみでる。人の心と、自然のあやなす集団も、また、自然をかたちづくる一本の木も、小さな草も、なにかの融合性をかたちづくるものがある。私たちは生物学をならったなかで、いちばん感動したのは人自然の生きものた

ちが示すいろいろな現象や、行動を人間が合目的に解釈したり、判断してはまちがいであるVということである。

なるほど、ヒマワリの花は、太陽にむかつてまわっている。しかしこの植物は、ある目的をもってまわっていると理解することとが、合目的な説明ということになる。森林の構成も、つねに因果的なルールのなかで活きつづけているのであるから、このルールを冷静に感じとり、そこにオリジナリティをもつ方向で、扱いを考えてゆく必要があるように思えてならない。

自然を考えるときに、名実ともにProteusから、Conservationの方向にすすんでゆく時代が、こなければならないであろう。
(道・林務部森林計画課)

知恵の不足

斎藤 慎 男

ふたたび恵庭岳の五輪道路問題が話題になりはじめた。札幌五番館横に五輪道路經由支笏湖観光バスへの立看板がある。五輪道路經由の文字を目立つように大書してある。商いの知恵とでもいっておこう。

組織委事務総長の佐藤朝生さんに会ったら「自然は大切にしなければ、なりません

ね」という。おっしゃるとおりである。「日本国民は、どうもファッショ的なところがあつて、国家的な大行事をやるとなると、ほかのことは目をつぶる癖があるようだ。札幌五輪にもそのことが、よく現われているとは思いませんか」こんな質問に佐藤さんは「百年に一度あるかないかの五輪。りっぱにやりたい」

五輪は、交通輸送が確保できれば、五〇%成功した、というのだそう。そこで、まだ輸送に不十分な恵庭岳に、もう一本の五輪道路を——というわけである。「組織委は、国家権力でもないし、力で押し通すようなことはしません」と佐藤さん。そうねがいたい。

昨年七月、北海道神宮の森が、やはり五輪道路のために伐採された。森の一〇%に相当する五四本のスギ、ナラ、イチイ、センノキである。スギは、神宮側が植樹したもので樹令六〇年。ナラはもつともっと古く、かれこれ二百年は経過している。神宮の森は電車を降りて、ポツクリポツクリ歩いている間につく。生活圏の中にある珍しい森。それをバツサリやって二七メートル幅の五輪道路をつくった。間違っていないやなかったか。この道路を通るたびに、そう思う。

恵庭岳五輪道路の理由に、こんな一項が

ある。すばらしい支笏洞爺国立公園を世界に紹介したい。そのためには、一人でも多くの観客をスムーズに輸送したい、と。神宮の森では、何を世界に紹介したい、というのだろうか。

五輪の日、ジャンプ競技に出場する選手そして観客は、同じ幅の、同じ舗装（もつとも当日は雪の下であろうが）の道路を経由して会場へ運ばれる。説明を聞いて、これが神宮というものか―彼らは、そう思っ

て通り過ぎる。森を伐採しなかったら、どうであろう。なるほど一時的に交通は、とどこおる。そこには、英文、北欧文の立看板がある。もちろん、看板の下の部分には日本語も読める。

こう書いてある。

『神宮の森は、札幌市民が、こよなく愛し育ててきた。人口百万の肥満都市・札幌の心のよりどころである。ここから三〇〇メートルは、道幅が狭く、世界のお客様には、いささか、ご迷惑をかけることでしょう。森を伐採して道路を拡げること、札幌市民が喜ばなかったからなのです』

スウェーデンの選手も、イギリスの役員も笑顔で看板を読み『グッド』というだろう。札幌市民は、自然を大切に。こんなことが書いてあった―海外のプレス・マンは、トピック欄に紹介する。

札幌を世界に紹介する、とは、こういうことではないのか、と思う。

神宮の森は、すでに切られてしまった。しかし、恵庭岳の、もう一本の道路は、まだ未決定である。『あと五キロだけ』と、

佐藤さんはい。確かに五キロ、いや、もっと短かくいおうとするなら四・五キロだけで、ここに道路が開通すれば、恵庭岳山麓循環道路ができる。しかし、道路をはさんだ両側の森林は荒廃をたどるだろう。

観光道路が、いかに森林を荒廃させるものであるかということは、すでに科学的な証明が行なわれている。

それでも組織委は、支笏湖を世界に紹介するために、もう一本の五輪道路をつくるのだろうか。知恵に不足はないか。

（北海道タイムス社部）

雪どけ雑感

井 後 武

北海道にも、ようやく春の気配が感じられてきた。例年のことではあるが、この時節がくると、いつも感じることは市街の悪路である。塵埃と煤とで黒く汚れた泥水が車道といわず歩道まで氾濫して、足の踏みどころもないありさまだ。最近、中心街で

歩道には大方ロードヒーティングが施されて、一見、近代化されたようではあるが、それが、かえって歩行者の足もとを汚す大きな役割をしているのは、まったく皮肉である。

車道を歩けば、前後から車が襲いかかって、いやというほど汚水を浴びせかけられる。一体、われわれはどこを歩けばよいのだろうか？。本来、純白であるはずの雪が黒い汚水に変わり、のびのびと自由に歩けるはずの街路が不愉快で、窮屈で、しかもはなはだ危険な通路となってしまったのも、文化、または科学というものの仕業の結果といっても過言ではなからう。

誰でも、よく冬山で経験することであるが、降りつづけた新雪が一面に山肌をおおいつくした直後、突如として紺碧の空が展開し、さんさんと輝く陽光を全身に浴びて素晴らしい景観に快談を叫ぶことがある。

時に何気なく、目を深々とつもった足もとの新雪に近寄せてみると、微細な雪の一片一片を改めて確認し、しかもその一つ一つが美事な六角に結晶して、ダイヤモンドのようにキラキラと輝いているのに気づいて、豊妙な自然の芸術に心打たれ、ただただ感嘆の声を発するほかはない。雪本来の美しさは、およそ都会のそれからは想像もつかぬほどに素晴らしい。

ところで、日本人は古来、花鳥風月を愛好する国民といわれ、風流をわきまえた人種として扱われているのであるが、それはあくまでも自己本位、自分勝手、利己主義の自然愛好であり、風流であるにすぎないと思う。

自然は、すべての人に与えられた自然である。万人が親しみ、一人も例外なく一様に楽しめるはずの自然である。それをわがもの顔に、勝手に山野の立ち木をそこない草花を踏みにじって、なおかつ恬として恥じないのが大方の日本人であることは、なんとしても情けない。

昨今、機会があつてハワイを見物に出かけたのであるが、聞きしにまさつて、空も海も、山も美しかった。島々に茂る緑の樹林、その枝に咲き誇る色鮮やかな花の風情も印象的であつた。しかも感心したことは、自然の姿がそこなわれず、美しく保たれていることである。日本の観光地のそれとはまったく別であつた。これは、必ずしもハワイの場合に限らない。先年、少しばかりアメリカを旅行したときも、観光地の彼方此方で、同じように感じたことである。

▲欧米の文化は罪の文化、日本の文化は恥の文化Vとベネディクト女史はいつているが、日本に関する限り、私はまったくそのとおりだと思う。体面を保持しカッコを

よくして、人様の前に恥をかかぬことが、文化と心得る人達の絶えない限り、世界の人々に恥じない快適な自然公園が実現するのは、まだまだ遠い先のことであろう。

(株)井後商事代表取締役)

失われゆく自然

「サロベツ原野」に想う

村本輝夫

「失われゆく自然」——きざにひびくことばが、最近、私の気持をとくにとらえてならない。

私は写真屋である。しかも、北海道の自然を写しつづけたという、欲望の強いカメラマンであると自負したい。であるから私の写そうとする被写体、写された作品がより自然のままであってほしいのである。それが失われつつあり、私を悩ませるのである。

人間は、人間の欲望のために自然をきり開いて今日にいたった、その開発の度合いが行き届きすぎて、一方の欲望——自然のままの姿を見たい——が犠牲になっているのではないか。残り少なくなった自然のところへ、テンボの速い開発、つまり破壊が反比例して進んでゆくのである。私がこん

なことを、いまさら書きたてるまでもなくさわがれている問題ではあるが、私なりに写真屋としてぶちまける次第である。

§

サロベツ原野——人間の生活のためになるかならないかの点からみれば、湿原はもつとも役に立たないものであろう。開発しようとするればほう大な費用のみこむし、第一、その手段としてやつかいなものであるに違いない。私はこの問題を、NHK在職中の取材で、はからずも知らされたのである。サロベツの開発は大草放牧場を目指して、現在も少しずつではあるが進んでいる。

私はサロベツ原野に愛着を持つ。なんの変てつもなく広がる原野ではあるが、この原野に初夏が訪れると、そこはエゾカンゾウの黄色い原野となり、地平線がエゾカンゾウで一線が引かれるのである。この黄色い地平線は、北海道のどこにもない。北海道になれば、日本中にもないことである。この初夏のひとときのサロベツ原野を私は愛するのである。

私のささやかな愛を知ってか知らずか、黄色い地平線を今年から掘り起こす企業があると聞かされて、私は私の恋人をうらわられるようなショックを受けてしまった。その企業は、エゾカンゾウの地下に眠る四メ

ートルの高位泥炭層を、化学材料に利用するのでさうである。エゾカンゾウの下がもつとも層がよいとかで、花のもつとも密度の高いところを掘るとのこと。そこに建物もできよう、煙突も立つであろう。私の求める黄色い地平線に、妙なものができてしまうのである。

§

この原野の開発をきめた人たちは、この花の季節を見てのうえできめたのであるうか。もしエゾカンゾウの大キョウ安を見ていたら、あるいは場所を変えるとか、中止するとかになったのではないかと思うのであるが、私の夢はしょせんあまいのである。一度天われた黄色い地平線は、永久に復元しないのに。

§

失われゆく原野のもうひとつに釧路がある。ここはタンチョウの生息地として知られ、保護されている湿原である。昭和三十七年の五月に、この湿原をタンチョウの営巣を撮影するためにヘリコプターで飛んだことがある。この広い湿原の中に当時営巣はわずか三方所、大栗毛と庶路の中間の鉄道線路のそばに一つと、合わせても四つしかなかった。この湿原も、大栗毛側から開発が進んで葦盤の目のように排水溝が掘られ、近くにあったタンチョウの巣が、取材中に野火のため孵化を前にして焼けてしま

った。

最近は大栗毛、庶路間にも住宅やし尿処理場のようなものが建つて、とてもタンチョウの住める環境ではなさそうである。タンチョウにとって冬の給餌もさることながら、夏の生活の場も保証してもらいたいところであろう。

§

サロベツ原野や釧路の湿原は、ほんの一例にすぎない。北海道のありとあらゆるところがむしばまれていく。自然をそのままで写そうとする写真屋にしてみれば、大げさにいうと死活の問題でもある。

昨年の夏、セスナ機を飛ばしかねてからの宿願であった渡島大島を写しに出かけた。雲の切れ間に島が生まれたそのままの姿を見つけて、私はほっとしたものである。しかしこのこと、いつまでこのままの無人でいられるかわからない。お月さまにさえ人が行ってくる時代に、この美しい島が人間の欲望の魔手から逃げつづけることができるであろうか。

こんなことを書くから、誰かが目をつけるのかも知れない。これ以上は書くまい。また、私の生活の場が失われるかも知れないから。

(北海道撮影社)